

2009 年 9 月

海外研究員(コロンボ)

荒井 悦代

2009 年 8 月、Postgraduate Institute of Management で行われたサラット・フォンセカ元陸軍司令官によるスピーチ内容を紹介する。サラット・フォンセカは軍司令官としてイーラム戦争 4 を率い、LTTE 殲滅を実現した。Business Today, 2008 年 12 月号の同氏のインタビュー記事 (Lieutenant General Srath Fonseka, The Man of the Moment) も参考になるが、そちらは戦争の後半をカバーしていない。このスピーチでイーラム戦争 4 の全体像が明らかになる。

私が 2005 年 12 月に陸軍司令官に就任したとき軍やシステムに対して人々が信頼感を失い、希望も失っていた。2005 年 11 月に大統領選挙で現大統領マヒンダ・ラージャパクセが勝利して、11 月にゴタバヤ・ラージャパクセ (大統領の実弟) が次官に就任。12 月に自分も就任した。その当時 2002 年 2 月からの停戦のおかげで軍の備品等は整備されていないし、兵士らはまともな訓練もされておらずモラルも低い状態だった。

そのため、LTTE と戦うには相当の準備しなけりばならなかつた。イーラム戦争 4 は 2006 年 7 月に始まったのだが、その前に、人の任命から始めなければならなかつた。フォーメーションも整え、新兵の補充などをおこなった。そうしている間に、国防次官が 2005 年 12 月に、そして私が 2006 年 4 月 25 日にコロンボで LTTE の自爆テロに襲撃された。3 ヶ月入院したがマビルアルの水門閉鎖などのきかけを逃すことなく、退院してすぐの 7 月に本格的な作戦を開始した。開始当時、軍には 3 大隊 (1 大隊は 500 人あまり) しかなかった。そのため軍は防衛が主務だったといえる。それでもひるむわけにはいかなかった。

軍事作戦には様々な分野で大幅な変更を加えた。その変更はすでに以前から行われていた、といえる。2002 年に停戦合意がなされたが、そのとき自分はジャフナで、軍のナンバー 5 として指揮を執っていた。そのときに歩兵部隊が弱点だと認識したので、それらの訓練に重点を置いた。その結果ウーマレにおける戦闘で歩兵部隊が生き残ったのは私が鍛えたからだといえる。結果的に 2006 年にイーラム戦争 4 が始まった頃には歩兵部隊は大夫鍛えられていた。

そこで今までの作戦と全く違うアプローチを取ることにした。通常の軍隊が採用するような戦略ではない。まずフォーメーションを変更して大きいフォーメーションから小さいグループにした。LTTE は、過去 4、5 年間にわたり典型的フォーメーションの軍隊と対峙してきたので混乱してしまった。

所有する武器も LTTE が戦車や武器を持っていたのに対して、軍は軽装でまるでスリランカ陸軍がゲリラのように振る舞ったといえる。

目標も変えた。小さいチームで移動して、領土の拡大よりもより多くの敵を殺しつつ、仲間の被害を最小限にすることに重きを置いた。典型的な戦略としての支配地域拡大に対する期待があることは知っていたが批判には耳を貸さなかった。現場のコマンダーにも目的を明確にした。そのため、東部の制圧までに1年と長い時間がかかったが、LTTE 要員を 2000 人あまり殺した（イーラム戦争 4 が始まった時点で LTTE は 25000 人と言われていた）。

その後は北部での作戦に本格的に移行したが、これまでの方法を変更して、LTTE の守りの堅いところ（マドゥー、マナー、ムライティブのジャングルなど）をあえて狙った。東部の攻略が完全に終わる前の 2007 年 5 月から北部に 5000 人を送り込んだ。東部を攻略しているときは 5 大隊しかなかったが、徐々に増やして最も多いときには 35 大隊になった。

軍は、作戦面で変革が必要だったが、汚職が様々なレベルではびこっており、スムーズに機能していない状態だった。これにもメスを入れた。司令官自ら入札会議にも参加して入札や会計についても不正がないよう目を光らせた。

軍では死傷者を補いつつ、拡大するための新兵補充も大々的に行った。それまでは年間 3000 人ほどの新兵を補充していたが、イーラム 4 においては一月に 3000 から 5000 人を補充した。

また、軍の内部では、年功序列を覆し、3、4 年の功績を評価する方法に変更した。戦場以外の分野においても同様に年功序列でなくした。

イーラム戦争 4 の後半では難しい段階に入った。2008 年の軍内部の死者は 2000 人、負傷者は 10000 人だったのに対して、2009 年 1-4 月のみで 2008 年の 1 年間と同じだけの死者・負傷者を出した。マスコミや外部からは強いプレッシャーを受けた。

もう一つ、戦略的に変更したのは情報収集と分析である。以前はこの分野が弱かったので、メンバーを入れ替えた。おかげで LTTE のターゲットを特定して攻撃することが可能になった（空軍は LTTE の幹部の隠れ家や武器倉庫を空爆、海軍は LTTE の武器・要員の海上輸送および密輸を阻止した）。

東部では軍のみでなく、警察・タスクフォースの援護を受けた。北部でも陸軍の他、空軍・海軍の活躍は目を見張るものだった。警察が後背地の治安を守ってくれていた。これらの支援がなければ前線で集中することができなかつただろう。

すでに述べたように、イーラム戦争 4 の序盤において支配地域の拡大は二の次にして LTTE 要員を殺害することに主眼をおいた。しかし 2008 年後半にキリノッチやプーネリンを陥落してからは支配地域の拡大が重要になってきた。目的は LTTE にプレッシャーをかけるためである。LTTE が戦略の変更を考える隙を与えず、時間をおかずにたたみかける必要があった。戦車や武器をさらに導入するなど費用もかかった。

このような戦略は、外部には不人気だった。しかし、戦略の必要性からこれを推し進めた。戦略面で外部に不人気な選択をした私であるが、私は内部の人間に対しても嫌がられるような改革を強硬に推し進めた。2008年には軍の脱走者が増えたので、それを防ぐために脱走者を逮捕して刑務所に送り込み、裁判にかける手続きをした。これは今までに行われなかった手続きであり、脱走者を防ぐことに成功した。汚職も徹底的に取り締まり、横流しなどがないようにした。

イーラム戦争4を開始したとき、LTTEに本気で勝てると思っていたのは極わずかであった。内外から私の軍における施策を良く思わない人は多かったろう。だが、多くの人々の協力を得てやり遂げることが可能となった。